

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第13号
2022年12月19日
編集・文責 吉成正士

(12号からのつづき)

それぞれの「生きる」

■今日人権学習で、いろいろな人の発表を聞いて、「なるほど」と思うことがたくさんありました。例えば、人と離れるのは今まで悲しいことだと思っていたけど、プラスに考えると、「新しい出会いが待っている」や、「新しい成長への一歩と捉えることができる」と感じました。

また、「生きる」という言葉には、いろんな奥深い意味が隠れているんだなと気づきました。その1つが、犯罪を犯すのは、生きる選択を間違えただけという発言で気づくことができました。人それぞれ価値観が違って当たり前だと思うけど、1つだけみんな同じ価値観のことがあるというのに気づきました。それは、両親からもらった命を大切にすることです。でも、あるきっかけで、その価値観をなくす人もいます。 (3組FK)

* * *

■僕は今回の人権防災学習で、「生きる」ということについての意見発表のときのGさんとKさんの意見が特に印象に残りました。Gさんの意見は、「心が生きることが「生きる」ということ。悪いことをしてしまう人は心が生きていないということ」という意見で、Kさんのそれに対する意見は、「悪いことをすること(心が生きていないこと)も、「生きる」ことの一部であり、しかし生き方の選択を間違えている」といったものでした。

自分はGさんの意見に最初とても納得していて、その後のKさんの意見にもなるほどと思われました。その2つの意見から、「生きる」ということは、人によって全然違うし、様々な見方があるということが分かりました。また、それを知識としてつけたうえで、もう一度「生きる」について考えることも大切なんじゃないかと思いました。 (1組SD)

前号でも「生きる」についての感想がありましたが、よほどみなさんにとって、考えさせられたということなのでしょうね。価値観が違うのは当たり前。どれが正しくて、

どれが間違いというものではない。それぞれの価値観でいい。では自分の価値観はどうか。語り合っていけば、もっと他の違った価値観が出てくるかもしれない。そのなかに、もっと自分に合った価値観があるかもしれない。自分の中で揺れて、考えてまた揺れて。それは私も同じです。大人だからといって、揺れないわけではありません。みんなと一緒に考えて考え、悩み、揺れているのです。そういう見方をすれば、先生も生徒もない、「共に考える仲間」というこ



とになります。

正しい判断をするために

■僕は今回の人権学習をして、東日本大震災が起こったときに、いろんなところで問題が発生していたことを知りました。あるところでは物流がストップしたり、被災地ではガスが止まったりして、とても困っていたと知りました。

差別とは日常では起こらなく、非日常で起こると知りました。そのときに差別が起こらないようにするために、人権学習が必要なんだと思いました。徳島でも南海トラフで大きな地震が起こるといわれているけど、そのときに正しい判断をしたいと思いました。

授業の最後に拉致事件の話をして、人には生きる権利があり、その権利を奪うことは絶対にしてはいけないことだと再認識しました。 (3組MY)

私は、「ちゃんと学んでいけば、差別やいじめはほぼ起こらないのでは」と思うのですが、ニュースでは毎日



のように差別やいじめの報道があります。ちゃんと学んでないのでは…とったりしてしまいます。学ぶ機会がないのかもしれませんが、よく知らずに、そう決めつけることはできないのですが。

コロナ差別もそうです。ハンセン病についてちゃんと学んでいけば、コロナ差別なんて起きなかったのでは、とったりします。でも、実際には起こってしまいました。どうしてでしょう。

一つ言えるのは、「一度学んだから終わり」ではないということです。人間は忘れる生き物ですから、いくら学んだと言っても、よほどインパクトの強い学びをしていない限りは、学んだ人権学習も忘れてしまうのだと思います。みなさんは大人になっても、今している人権学習のことを、覚えていられる自信はありますか？ 多くの場合が、中学を卒業すれば、人権について学ぶ機会はなくなってしまいます。つまり中学3年がピークで、それからはどんどん人権意識が薄くなっていってしまう。だから、いつかどこかで学んでいるはずなんだけど、時間が経って忘れてしまっているのではと思うのです。その結果、自分の中だけで、自分勝手に結論づけてしまうような人権意識になってしまうのではないかと思います。

では、そうならないようにするにはどうすれば良いか。みなさんになら、少し分かるかもしれません。それは、「人権について語り合う」ことです。しかも、人権全体学習や人権の授業といった非日常的な場だけで

はなく、日常的に「人権について語り合う」ことです。大切なのは日常です。語り合うことで、他の人がどんなことを考え、どんな意見を持っているか、しかもそれを自分のなかに取り入れることで自分も成長できるということをちょっとだけ実感していますよね。しかも1回きりではなく、繰り返し繰り返し学習を重ねていくことで、いろんな問題が人権と結びつくことも分かってくるのではないかと思います。つまり、日常的に「人権について語り合う」ことが習慣になることです。そんな関係性ができていけば、いくつになってもつながり続けられるし、立場を越えて悩みごとの相談もできるのだと思います。

先日、私が最後に中3担任をした二人が、この秋に産まれたばかりの赤ちゃんをそれぞれに抱いてやってきました。これまでいろんな出来事があり、つらい思いや苦しい思いを抱えながら生きてきた若いママ二人です。そんなことを知ってるのは、中学3年時に、徹底して人権について話し、語り合ってきたからだと思っています。部落差別についてもそうですが、いろんなことについて語り合うことが日常だったから、胸の中にあることを包み隠さず言えるようになったのではないかと思います。そんな関係性がつくれれば、人は孤独でなくなり、つながりの中で生きていけるのではないかと思います。私たちがつくりたいのはそんな社会、そんな教室ではないでしょうか。

「風の電話・心の復興」

■防災学習は小学校のときから受けてきました。でも、実際に家の人から体験談を聞いてくるという課題があったり、防災と人権学習を結んだりすることによって、今まで感じなかったことも感じました。特に精神面や、「心の復興」についてです。

「二つのふるさと」では、故郷に対する思いについて考える機会となりました。私自身も、生まれは松山で、今は徳島で暮らしていて、故郷がどこかとか考えたことはなかったけど、大切な人や場所との別れについて共感できました。

私の家に、「風の電話」という本があります。岩手県の佐々木さんの自宅の庭にある、「風の電話ボックス」をもとに作られたものです。会えなくなった人に思いを伝えたい…。すごく感動のラストがあります。

「自分の身は自分で守る」に加えるとするなら、「他人の身にも気を配る」でしょうか。私たちが防災・減災と聞いて思い浮かべるのは、身体的生活です。でも、精神的なことも大事だと思います。避難所で自殺する人もいます。『心の復興』ができる人になりたいです。

(2組KM)

「風の電話」東日本大震災をテーマにした小説で、映画化もされています。DVDにもなっています。みなさんに観てほしい映画です。

この年末年始、映画館に行く人もいるかもしれませんね。私からいくつか紹介させてください。

◆もう観に行った人も多いかもしれませんが、「すずめの戸締まり」。17歳の少女・鈴芽が日本全国を駆け巡り、自然災害に立ち向かうファンタジーです。新海誠監督の前作「天気の子」は、異常気象がテーマに描かれていました。前々作の「君の名は。」は、隕石落下

という災害が描かれていました。そして今回は、東日本大震災。いろんな表現法や学び方があっていいものです。今回の学習のつながりとして、観に行ってみてはどうでしょう。

◆2つめは、言わずと知れた、「Drコトー診療所」。孤島の僻地医療に人生を預けた一人の医師の物語。医療ヒューマンドラマです。医療系に興味のある人はどうぞ。

◆3つめは、「ラーゲリより愛を込めて」。二宮和也、北川景子、松阪桃李、中島健人と、そうそうたるキャストです。

第2次世界大戦時、中国大陸にいた日本人のなかで、戦争が終わったにもかかわらず旧ソ連に捕らえられ、シベリアに連れて行かれた日本人がいました。50万人を超える人数のうち、1割の人々が寒さと飢えで命を落としています。今もその遺骨は現地に残ったまま、日本に帰還することができていません。そんな人たちが暮らしていた家を、ラーゲリと呼びます。ヒロシマやナガサキ、オキナワだけじゃない戦後の戦争の物語を、ぜひ知ってほしいと思います。

◆4つめに「かがみの孤城」。原作は本屋大賞を受賞。不登校で家に閉じこもっていた中学生の「こころ」が、鏡の世界に吸い込まれ、同世代の仲間と出会います。でも、どことなく違和感を感じるその謎が、少しずつ明らかになっていきます。読み進めるうちに、次を読みたいのに、終わってほしくない感情が溢れ、読みたいたのに読みたくない、という葛藤に苦しみました(笑)。本好きな人はぜひ読んでみてください。単行本も上下巻で出ています。そのアニメ映画です。

どの映画も、「生きる」をあらためて考えさせてくれる作品ばかりです。観て、日常的な語り合いをしてみてください。

最後まで読んでくださってありがとうございました。新年が、みなさんにとって素敵な一年になりますように。。。🐰🐰🐰

